

鼎談

日本語教育学のこれまでとこれから

—早稲田の日本語教育を基点として—

鼎談者：吉岡英幸・細川英雄・蒲谷 宏
企画者：古屋憲章・高木美嘉・舘岡洋子

0. 「鼎談」に至る経緯

古屋：それでは、時間になりましたので、始めさせていただきます。この時間は、「企画」ということで、鼎談を企画しました。私は、今回の鼎談の企画者で、司会を務めます、古屋です。よろしくお願いします。今回の鼎談は「日本語教育学のこれまでとこれから—早稲田の日本語教育を起点として—」ということで、吉岡英幸先生、細川英雄先生、蒲谷宏先生にお話しいただきます。最初に少しだけ、今回の鼎談を行うに至った経緯を説明したいと思います。もともと吉岡先生と細川先生は来年の3月で退任をされるということがあったので、私は個人的な興味から、戦後の日本語教育に関する証言をぜひ、聞いておきたいと思ひ、両先生にインタビューをしたいと思ひました。まずは、吉岡先生にインタビューを申し込んだところ、快く引き受けていただいて、インタビューを行いました。そのあと、細川先生に「インタビューしたいんですが」と言ったら、「僕のインタビューを聞いても面白くないから、吉岡さんと早稲田の日本語教育の歴史について対談がしたい」と言い出して（会場笑い）、それでこの鼎談の企画がスタートしました。ところが、早稲田の日本語教育の歴史ということになりますと、細川先生と吉岡先生は早稲田のご出身ではありますが、1970年代の後半から80年代にかけては、早稲田にいらっしゃいませんでした。ということで、その間ずっと早稲田にいらっしゃった蒲谷先生にも参加いただいて鼎談にしたらどうかということになって、このような形になりました。そして、これはもともと文字化するつもりではあったんですが、どうせやるなら公開でやってはどうかということになりました。さらに、より公開の範囲を広げるということで、今回初めての試みとして、こちらにカメラがあるんですが、このカメラを使って、Ustreamを介して、インターネットで配信しています。カメラは固定されていますので、こちらしか映りません。みなさんの方は全く映らない状態です。ただし、声は入りますので、後で質問をされるときに声が入るということをご了承いただければと思います。今現在こちらに数字が出ていると思いますが、18人の方がこれを見ているという状態です。たぶんこれからちょっと増えてきて、あ、19人に

なりました。何か言いたいことがあれば、そこに書き込みができるので、もし時間があればそこに書かれたものも拾ったりしたいと思っています。それでは、さっそく始めたいと思います。進め方としましては、私の方で三つの問いを準備しました。それらの問いに従って、それぞれの先生方にご自身のご経験としての早稲田の日本語教育を語っていただきたいと思っています。

それでは、始めます。まず、一つ目の問いとして、いつ、どのように、日本語教師を自身の生業とすることを決めたかという問いを立てました。では、まずこの問いについて、それぞれの先生方に少しお話しいただきたいと思っています。

1. いつ、どのように、日本語教師を自身の生業とすることを決めたか

吉岡：それでは、まず私から話を始めたいと思います。まず、私と日本語教育の関わりを話す前に、戦後の早稲田の日本語教育の開始についてちょっと話をしておきたいと思います。早稲田大学は、もちろん明治期から日本語教育を始めているわけですが、戦後に関しましては、1954年に留学生に対する日本語教育を、補習授業として教務部の所管で始めました。だから、これは、正式な科目としての授業ではなかったわけです。当時は、専門の日本語教師というのは、早稲田にはいらっしやなかったようで、国際学友会から先生がいらっしやったというふう聞いています。1962年に語学教育研究所が開設されました。この語学教育研究所、通称「語研」と言っているのですが、この語研に日本語教育が移管されて、そこで日本語教育が開始されました。そして、翌年1963年に国際部が開設されました。国際部というのは、ご存知かもしれませんが、これはアメリカの大学との提携によりまして、1年間アメリカの大学から早稲田大学に留学をしてきて、英語でいろいろな科目の講義を受ける。それで、外国語として日本語が必修になっているプログラムです。ですから、それ以降、かなり長い間、早稲田大学の日本語教育というのは、語研と国際部と2カ所で行われていたということになります。実は、私が早稲田の学生として入学したのが、この国際部が設置された1963年なんです。そのときは当然、日本語教育というものは全く知らない。そんなものがあることすら知らなかったのですが、ちょうど私が学部の3年のときに、学内でアルバイトがあるので誰か行かないかという話になって、紹介されて行ったところが、この語研の日本語教育部門だったわけです。そこで私は、学内に留学生がいるっていうことや、日本語教育という専門があることを初めて知ったわけです。アルバイトの仕事が何かっていうと、教材なんです。今私は自分の専門を日本語教材としているんですけど、初めての出会いがそのときだったんです。教材のコピーをして穴をあけてファイルをして留学生に渡すという単純な作業なんです。そういう仕事を、たぶん1時間100円ぐらいのバイト料でやっていたわけです。それが日本語教育との初めての接触でした。正式に日本語を教えるようになったのは、学部を卒業して文学研究科に入った1967年からです。専門は日本文学だったのですが、アルバイトを探さなければいけない。そのとき語研の先生の紹介で、当時、海外技術協力事業団、これは現在の国際協力機構、JICAと言われていた組織なんです。そこで技術研修生に対する日本語教育をやることになりました。

しかしこれは、アルバイトということで、まだ生業にしようという意識はない。そんなふうにして日本語教育を始めたのですが、大変運のいいことに、1968年、経験はちょうど1年半しかなかったのですが、大学院生としての身分があったのに、早稲田で教えないかという話をもらいました。当時は日本語教育の経験者が少なかったのです。それで、国際部でも日本語を教え始めることになりました。身分は講師、非常勤講師でもなく、嘱託という辞令をもらいました。そういう形で日本語教育を始めたわけです。この辺から、日本語教育というものを自分の職業としてやろうかなという意識が芽生えてきました。ただし、食べていけるような状態ではないですね。周りを見ても、早稲田に来ている先生たちはほとんどそうなんです。みんな非常勤講師を掛け持ちしていかないと生活が成り立っていかない。そのためか、ほとんどが女性なんです。現在もそうだと思うんですが、なかなか男性は先が見えない仕事は選ばないということがありまして、多くの人が不安を抱えて掛け持ちをしながらやっていたという時代です。1973年に、もう修士を終わっていたのですが、語研でも教えないかということで、両方掛け持ちをしました。この頃からもう、日本語教育の専任の口を一生懸命探さなければという気持ちは固まっていたのですが、なかなか簡単ではなかったんですね。そんなとき、私が終生影響を受け、お世話になった木村宗男先生という方が語研にいらして、その先生の紹介、推薦で、1974年に東京外国語大学附属日本語学校というところに勤めることになりました。これが正式にというか、専任の日本語教師としてのスタートになったわけです。実を言いますとアルバイトとして教えていたとき、日本語教師になることにちょっとためらいがありました。一つは、私は国語教師になりたいという気持ちがあって、一年間、横浜にある桐蔭学園というところで国語の教師をやったんです。だけでも、先生たちのアドバイスというか、早く日本語教育へ戻れと言われましたし、私自身、日本語教育というのは、やっぱり、違う文化の背景を持った人たちと接触するということはずごく奥深いという気がしたんです。それで、これはたぶん一生の仕事としても飽きないだろうなというように感じました。それで、1974年に外語大の日本語学校に行って、それからずっとこの道を進んで行ったということです。

細川：細川です。一人5分という約束なんですけども、今、吉岡さんが7分ほど話されたので（会場笑い）、私もなるべく超過しないように簡略に話します。吉岡さんは今、1960年代から70年代にかけての御自分の日本語教育への入り方の話をされました。私の場合は、吉岡さんと七つ歳が離れていまして、もう少し後の時代、昭和42年、1967年に早稲田の一文に入りました。この時代、最初の2年間は教養課程ですので、何をやるか分からなかったんですけど、ことばについては関心があったのです。ちょうどその年、1967年の秋に、その前から東大から早稲田に来ていらした時枝誠記博士が亡くなっているんです。ですから、時枝誠記の最後の弟子に私はなり損ねたという思いが今もあります。ことばに興味があったので、文学部にいましたけれども、分野としては国語学、今で言う日本語学を選んで、国語学の修士、それから博士に進みました。はっきり言って、そのころは、日本語教育に全く興味がありませんでした。国語学という自分の職業、研究者として何ができるかということは考えてはいましたけれども、特に日本語教育との関係は考えていませんでした。博士課程を、助手を務めながら、一応、終わらして、

1979年に信州大学の教育学部に専任教員として就職しました。教員養成学部ですから、担当は国語科の国語学担当という形で就職したんですけれども、初めての就職で一番ショックだったのは、自分が学んだ国語学が、国語教育に全く役に立たないということでした。これは私にとっては大変ショックでした。つまり、文法はどう教えるかとか、ことばってというのが子どもにとってどんな意味があるかとか、そういうことをやっていたわけなんですけれども、現場に巣立っていく学生たちは、そういうことにはほとんど興味がないんですね。地域性もあるかもしれませんが、その現場で話題になっていることは、こどもの目が輝いているかどうかということだったんです。まだ30歳そこそこだった私なりに、自分が学んだ国語学が何に貢献できるかということについて、そのとき、かなり悩みました。自分の国語学を活かせる方向はないだろうかということを考えていたときに、日本語教育という分野に、理論的に出会ったというわけです。別に周りに外国人や留学生がいたわけでもないんですけれども、そういう分野があるということを経験的に知って、日本語教育というのはどんなものだろうという形で、今から考えてみれば、とても「頭でっかち」の形で日本語教育に入りました。それで、1983年からフランスで1年間日本語を教えることになったんですけれども、その直前の1982年夏に、日本語の教授法等をめぐって、やっぱり養成講座をきちっと受けておいた方がいいという先輩の勧めもありまして、渋谷の言語文化研究所付属東京日本語学校、現在の長沼スクールで養成講座を受けました。その養成講座の中で木村先生の模擬授業に出会ったのです。木村宗男先生については、ちょうど今、吉岡さんのお話に出ましたけれども、そこで、今まで自分が頭だけで考えていた日本語教育と、木村先生が見せてくださった模擬授業が全く違うものだったというところで大きなカルチャーショックを受けました。しかし、それは私にとってはたいへん刺激的なものでした。その翌年フランスに1年間日本語を教えに行きましたが、まさにその木村先生のやり方、というか考え方・方法を自分のものにすべく、フランスで1年日本語を教えていたという、そういう時代でした。それが私にとっての日本語教育入門と言えるだろうと思いますし、私にとっての日本語教育への大きな転機となりました。その後フランスから帰ってきて、今度は、教員養成で国語学を教えているという自分にうんざりしてしまって、日本語教育を専門にやろうと決意し、別の大学の日本語教育のポストの公募に応募し、1986年から金沢大学の「日本語・日本事情」という担当に移りました。そこで今度は、「日本事情」というまた別の問題に出会って、そこでまたいろいろ考えることになるのですが、今その話をするととても長くなるので、やめます。私が日本語教育の世界に入り込んだ最初のとっかかりのところの話をしました。別に宣伝をするわけではないんですが、今お話したことは、この9月に出版した『研究活動デザイン—出会いと対話は何を変えようか—』（東京図書）という本の中にすでに書いてしまったんですね。ですから、古屋さんに、自分のことを話してくれと言われても、書いてしまったことをあまり話したくなかったので、それで吉岡さんを巻き込んで、もっと違う、いろんな角度からやってみたら面白いんじゃないかというのが、先ほどの古屋さんの提案を受けた私のほうの話です。少し長くなりました。今度は蒲谷さんに替わります。

蒲谷：第三の男、蒲谷です（会場笑い）。よろしくお願ひします。5分間に挑戦します（会

場笑い)。自分の履歴を語るようなお話になってしまうんですけども、細川先生と私との間は8年間空いていて、大きな差があるんですが、ただ細川先生と私は非常に近くて、直接の後輩なんですね。ですから、学部も第一文学部日本文学専攻国語学、大学院も文学研究科、専攻そのものとしては日本文学専攻の国語学ということで、8年間遅れて後を追ってきたというところがあります。先ほど、時枝誠記の話が出ましたが、今日のレジュメの32ページにも載せてありますけれども、私の一番の基には時枝の影響があります。時枝は、言語というものは過程、プロセスであるというふうに言いましたけれども、私は言語というのはコミュニケーション行為そのものだと規定していますが、そういう考え方に学部の2年のときに出会いました。そのときに出会って、それからずっと影響を受けてきました。この言語観、日本語観を追究していきたいと思いました。時枝の国語教育観にも影響を受けました。私の、細川さんもそうですけれども、指導教授だった辻村敏樹先生は敬語の専門家ですが、当時は、ちょっと怖くて、敬語はできませんでしたので、違うことをやっていました。けれども、たぶん基本にあるのは、そういう言語はコミュニケーション行為だということから入って、それは、その後ずいぶん経ちましたけれども、ずっと続いているということです。その後、1979年に大学院文学研究科の中に現代日本語コースというのができました。現代日本語コースというのは、日本文学専攻の中の国語学と並んで、現代日本語について考えるというコースですけれども、日本語教育とも絡む専攻なんですね。そこで、私が大学院に入ったときにそれが始まって、そのときの第一期生に小宮（千鶴子）先生がいらっしゃいました。そのときは、教育学部が本属の白石大二先生が指導教員でしたが、その中で木村宗男先生の教授法の授業もあって、それは私も取っていました。ですから、大学院に入った時点では、日本語教育のことはまだよく分からない、関心があったのは国語教育の方だったんですけども、でもそこで木村先生の教授法の授業を受講したんですね。そこで武部良明先生とか森田良行先生とか語研にいらした先生方の授業なんかもあったということで、日本語教育ってそういうものかなと思いました。あと、韓国からの留学生の人が同期生にいましたので、少しずつそういう形で目が開かれていったかな、というそんな印象があります。私は修士課程を終わってから、一時国語教育の方で、私も高等学校の教員を……していたと言えるほどしていませんでしたけれども、1年間横浜の方の県立高校に勤務していました。そのときには、私も生徒の目が輝いているかどうかということに、非常に熱心に関心を持ってやっていたんですが、授業を始めるまでが大変でした。とにかく席に着かせるまでが勝負というところがありました。みんな廊下に座っています。そこから授業を始める。非常にいい経験をして、教育とは何かということを感じたんですね。私が日本語教育を自身の生業とするということを決めたのは1981年ですね。高校に勤めていたときに、先ほどから話題に出ている、語学教育研究所、語研の方で助手の公募があるというお話をいただいて、そこで決断をしたということです。語学教育研究所の中の日本語部門の中の助手を採用すると。時期としては、ちょうど木村宗男先生が退職なさる年でした。そのときの私の先輩は、川口（義一）先生です。川口先生が私のすぐ前の助手をされていて、川口先生は82年から専任講師となり、私は82年に助手として入りました。私自身は、国語教育も日本語教育も、そのときにはまだそれほど

断定的には言えませんが、共通していると思っていました。日本語の研究と日本語に関する教育が私の関心事でしたので、その中では矛盾はありませんでした。今でもそれは変わりません。国語教育と日本語教育は、もちろんいろいろな違いはあるんですけども、どちらも日本語に関するものだと、日本語に関する教育なんだという点で、矛盾は感じていませんでした。ただ、入った時点では、私にとっては最初の異文化の体験とも言えるような状況でした。当時の語研は、外国語教育とそれから日本語教育が大きな2本であって、外国語教育の方の先生方はいろいろ個性的な先生がそろっていました。当時、語研には、いろいろな語学のNHKの講座を担当されていたような有名な先生方もかなりいらして、そのときには、ドイツ語だと子安（美知子）先生とか、上田（浩二）先生とか、それから朝鮮・韓国語だと大村（益夫）先生とか、中国語でも牧田（英二）先生とか。いろいろな外国語教育と日本語教育との関係というようなことで、かなりショックを受けながら、助手を務めていました。先ほど吉岡先生のほうからもお話のあった国際部の方で日本語教育がありまして、当時は夏ですね、長野県と新潟県の境あたりにある池の平というところで3週間ずっと学生たちと一緒に生活を共にしながら日本語を教えるということが最初の体験でした。早稲田の中では、高麗大学の学生たちに対する夏期講座というのが最初の体験でしたが、中級の教科書を使って、7号館の屋上に作られたプレハブの教室で教えたのを今でもはっきり覚えています。池の平の合宿では、当時は川本喬先生が主任をされていて、今、東北大学の才田いずみ先生とか、前の日本語教育学会の会長もされていた西原鈴子先生とかも一緒にその合宿に参加されて、教えていたと、そんなような記憶があります。やっぱりダメですね。5分経っちゃいました。とりあえずそんなところから、私の日本語教育が始まったということですね。

古屋：今の話の中で、木村宗男先生の名前が結構出てきたんじゃないかと思います。私たちにとっては、歴史上の人物なんですけれども（会場笑い）、どのような方だったのかとか、あるいは、どのような影響を受けたのかということに関して、もう少しお話しただければと思います。

吉岡：先ほどお話ししましたが、私は学部生のとき、アルバイトとして語研に出入りをしているとき、木村先生の授業に出て、後ろで見学させてもらうことがあったんですね。そういう話をすると、なんと贅沢な、といろんな人から言われるんですが、そのときはその重要さが分かっていない。今思い出しても、強烈に印象に残っている木村先生の授業というのは、たとえば、助数詞を教えるところだったんですが、1本、2本、3本というような数え方を教えた後、「私の万年筆を数えてください」というふうにおっしゃって、まず内ポケットから1本、次に2本、3本と取り出す。学生は3本くらいになると、「ん？」となってくるわけです。別のポケットから4本、5本、6本。そのころにはみんな身を乗り出してくる。10本以上になると、みんな拍手するわけです。そういう授業だったんです。私は日本語教育はそれが当たり前だというふうに思っていました。私が初めて教えた事業団の夜の授業というのは、福利厚生の一環ですから、出席は義務ではない。下手な授業やってたら、誰も来ないんです。いかに楽しく魅力的な授業をするかということが求められるのですが、そういうときの授業での工夫とか、取り組み方などに木村先生の影響を受けたと思います。

細川：私の場合は、先ほど申し上げたように、1982年夏に長沼スクールで養成講座を受けたときの模擬授業だけなんです、木村先生との直接的な接触は。もちろん、論文は読んでいましたし、ちょうどその前後に出された、凡人社から出た論文集（『日本語教授法—研究と実践—』）がありますけれども、ちょうどその定年の前後のときだったと思います。ですからたぶん、蒲谷さんが助手で入られたちょうど同じころに、私はその養成講座を受けたというわけです。さっきカルチャーショックだと申し上げたのは、やっぱり今、吉岡さんが言われたのと同じなんです。まず場面があるんですね。つまり、学習者との出会いがあって、そこでその学習者に「お名前は？」と聞く。それから、「お仕事は？」というふうにきく。そして、そこで分からない言葉があると、「こうですか？ ああですか？」というふうな言い方をしながら、やりとりが始まるわけです。とにかくやりとりがずーっと起こるんですね。それはいわゆる普通におしゃべりをしているようだし、だんだんおしゃべりはその人について深くなっていく。もちろん模擬授業ですから、その場面ですれほど深くなったわけじゃないんですけども、深くなっていくということが予想される。そして、「じゃあ、今日のテキストを見てみましょう」と言ってみると、今そこで行われたばかりの会話が、テキストの中に展開しているわけです。つまり、まずテキストを勉強するんじゃなくて、まず学習者と一対一の対面のやりとりがあって、そこで、いわば問答が起こる、対話が起こるわけですよね。それを作っているということ、それがすごいなと思ったんです。しかも、それはにこにこ笑いながらやっているようだけれども、実はとてもよく計算された形で、木村先生の頭の中に入っている。そのことに私は感動しました。のちにそれは乗り越えなければならない問題だと自覚するようになるわけですけども、そのときは本当に感動しました。もう一つ、それは本（『研究活動デザイン』）に書いていないことなんですけれども、そのとき木村先生が別れ際におっしゃったのは、「国語学やってるからって言って、日本語教育はそんなに簡単にできるもんじゃないよ」って、一言言われました。そのときは、そのことがどういう意味なのか、よく分からなかったのですけれども、それは後から分かるようになりました。だから木村先生は、当時の国語学と日本語教育の違いというのを体験的にも理論的にもかなり自覚されていたんじゃないかなという思いが、今になってみるとあります。

蒲谷：木村先生で思い出されるのは、木村先生が初級のときの授業で使われていた「魔法の木箱」と言われるようなものがあるんですね。引き出しがいろいろついていて、いろんなものが出てくる、そういう「魔法の木箱」があって。木村先生が退職されて、私が（語研に）入ったので、実はその木箱を助手である私が預かっていた時期があります。それがすごく思い出されます。今たぶん川口先生がお持ちじゃないかと……。 （吉岡：私、私が持ってます。）吉岡先生ですか、ごめんなさい。吉岡先生がお持ちだそうです。興味ある人は、それは非常に貴重なものなので、ぜひ。それから、あと、木村先生が……。すみません、今日、いろいろ提示する情報があまり正確な情報ではないかもしれないので、後でいろいろ事実関係を確認しなきゃならないところがあります。今日はなんかライブ感を大事にしようということで、あんまり準備するなというような感じがありましたので、特にきちんとした情報をお伝えすることはできないかもしれませ

んけれども、たぶん国研から出ていた日本語教育教材のビデオの初級編、1課から30課ぐらいまであって、29、30課あたりが敬語なんです、そのときに木村先生がそのビデオに出演されています。奈良の瓦の研究者か何かで登場されるところで、独特の木村先生のセリフ回しが印象的な教材があります。今どこで見られるか分かりませんが、どこかにはあると思いますので、興味、関心ある方、木村先生が動いて話をしている様子が分かります。すみません、その程度の紹介です。

吉岡：今、蒲谷先生の話では、国研の映像教材、「日本語教育映画基礎編」と言っているんですが、30課に教授の役で木村先生が出てらっしゃるんですね。まさに教授そのものが役として出てらっしゃる、というのがあります。それから、その通称「木村箱」。学会では有名なんです、残念ながらちょっと壊れていまして、私は修復できないんですね。あれは大工さんに、自分で設計図を書いて作らせたんだそうです。自動詞、他動詞、それから条件などを教えるためなんです。開き戸があって、留め金を外すと、バネのついたほうの戸は勢いよく「開く」、片方の戸は閉まったままでの手で「開ける」というような、いくつか仕掛けがあるんです。それが有名な通称「木村箱」なんです。

2. 1980年代から1990年代にかけての早稲田の日本語教育をどのように経験したか。または、どのような印象を持っていたか

古屋：今のお話が、だいたい1970年代くらいのお話かと思います。その後、1980年代に入って、日本語教育の世界は、「留学生受け入れ10万人計画」の影響などもあって、大きく変容していきます。そこで、その1980年代から90年代にかけて、早稲田日本語教育というのをどういうふうに経験したか、あるいは、吉岡先生と細川先生は、先ほどもおっしゃいましたが、その時代に早稲田にいらっやいませんでした。ということで、外から見ていて、どのような印象だったかというようなことに関して、お話しただければと思います。

蒲谷：それでは、今度は私からですね。1980年代についてですが、これはあくまでも私の目を通して見た早稲田の日本語教育というふうにご了解ください。多少事実誤認があるかもしれませんが、また、私の勘違いも含まれているかもしれません。私は1982年に助手になりました。で、4年間助手を務めておりました。そのときは博士課程の学生も兼ねていたんですけども。そこで、日本語教育公開講座がずっと展開されていました。助手は、そのとき司会を担当するので、そのときの公開講座4年分をずっと聞きながら、助手の時代を過ごしていたということを今思い出します。86年に専任教師になりましたけれども、当時は、そういういろんな時代背景があって、やはり、今振り返ってみると、文型中心の授業だったと思います。私も、初級、中級、上級と担当しましたけれども、特に中級あたりは、中級の文型をどう扱うかというあたりがすごく課題でした。そのとき、筑波（大学）の中級文型（『日本語表現文型中級Ⅰ』『日本語表現文型中級Ⅱ』凡人社）、佐久間（まゆみ）先生がいろいろ関わられたと思うんですけども、それなどを使ったりしまして、どうやってこの文型を教えるかとか、どうやってこの類義表現を扱ったらいいのかというところはかなり苦心をしていたというのが、今思い出

されます。当時早稲田では初級の教科書だけがあって、のちに上級の教科書もできましたけれども、中級の教科書も随分作成したんですね。いろいろな材料を集めて、中級教科書をかなり時間をかけて作っていました。それは、市販されるまでには至らなかったと思います。でも、何度も作ってはまた作りなおし、ということでやっていた、そんな時代だったかなというふうに思います。1988年に先程から出てきている語学教育研究所の日本語部門が独立しました。独立して、1988年に日本語研究教育センターという形で独立をしました。そのときにもいろいろ、私も、そのとき歳が一番下の、しばらくずっと下だったんですけども、教員として関わっていました。これも、しばらく前からここに居る人は同じような話を何度も聞かされたかと思いますが、当時は「日本語研究教育センター」というふうにして立ち上げました。そこには意味があって、日本語を研究して教育するんだ、だから「研究教育センター」なのだとのことでした。現在は、「日本語教育研究センター」、日本語教育を研究するセンター、日本語教育をしながら研究するセンターということで、名称が変わりましたが、そのあたりは細川先生からお話があるかもしれません。1988年にセンターとして独立しましたが、当時はやっぱりレベルごとのクラスですね。初級・中級・上級というような形で分かれていました。ただそのあたりから少しずついわゆる四技能別のクラスに移行してきていました。ですから、同じ中級のクラスにいるけれども、読解の力は上級だが、口頭表現の力が初級だというようなタイプの学習者をどうやって扱うかというあたりは常に問題にされていて、それは次第に四技能別のクラスにということを考え、それに移行していったということがあります。もちろんそれぞれに利点と問題点があるということで、その辺もずっといつも話題になるし、議論をしてきたところかなど。そのためのカリキュラムをどうするかとか、そのための教材をどうするかといったようなところで。今思い返せば、当時の日本語教育のいろいろな背景と合わせて考えると、(早稲田の)日本語教育も、やっぱりそうなのかなというふうに思います。ただ、もちろんいろいろな問題点がないわけではなくて、やはり大学の日本語教育はどうしても受動的であって、大学で採った留学生に対する日本語をなんとかしてくれというような形で、請け負うというようなそんな意識がありました。ですから、しばらくは安定していたと言えば安定していたわけですけども、どうしてもやはり受け身の態勢ということにならざるを得なかったのかなと思います。このあたりは認識が異なる先生がいらっしゃるかもしれませんが、どうしても受け身の感じはしました。それはある意味やむを得なかったというふうに考えています。そこで何か切り開いていくというよりも、日本語教育の、ある意味、中身にどっぷりとつかりながら、どうやって教えるんだとか、こういうふうに教えたなら分かりやすいんだらうかとか、授業を楽しくするにはどうしたらいいかとか、学習者が生き生きとできるにはどうしたらいいか、というような、そんな方向で、たぶんしばらくは進んできたということだろうと思います。私からは以上です。

吉岡：私は、先ほど申し上げましたように、1974年に東京外国語大学付属日本語学校、これは国費の学部に入る留学生たちがゼロから学習して、1年間で日本人と同じように国立大学に進学していくので、それについていけるための日本語能力を身につけることを課された組織です。大変恵まれた組織で、60人の定員なんですが、専任が17人+非

常勤。全寮制で、体育館や運動場を全部完備しているようなすごい組織でした。そこで、日本語教育をずっとやっていました。1980年代というのは、日本語教育の世界が非常に大きく転換をした時期です。特に国立大学にいと、それがよく分かりました。1983年に「留学生受け入れ10万人計画」というのが打ち出されて、翌年(1984年)すぐに第1回の日本語能力試験が、その翌年(1985年)に東京外国語大学と筑波大学に日本語教師を養成する学部が立ち上げられました。その翌年(1986年)には、国立の8大学に留学生センターが設置されたというような時代なんですね。私がいたところも、1986年に、留学生教育教材開発センターというものの企画をしていただいたら、文部省でそれが通ってしまう。認可されて、私はその教材開発センターのほうの部門に移ることになるんですが。そういうようなすさまじい変わり方、膨張と言いますかね、をした時代でした。私としては、早稲田大学は母校でもあるし、かなり気になる存在だったんです。いろんなよその機関の動きは、目立つところは分かるんですが、外から見ていると、早稲田大学の変化というのはあまり感じられなかった。今、どういうふうになっているのかなあと気になっていました。つまり、外からはその動きは読めなかったといえますか、表立った動きはあまりなかったというふうに、私には見えました。1990年に、私は誘いを受けて、早稲田大学の日本語センターに移ってきました。早稲田に帰って来て、一つ驚いたことは、すごく楽なんです。これで給料もらっているのかなと思うぐらい。本当にそう思っていました。環境はあまり良くないというか、研究室は個室ではなくて2人部屋だったんです。そのこと自体は別に不満ではなかったんですが、同僚、日本語センターの先生たちの研究室がばらばらなんですね。いろんな建物に分かれている。話があんまりできない。ある場合は、1日誰とも同僚と顔を合わせない。「もう帰っていいのかな。まだ明るいのに。」というように思うことがしばしばあった。前のところは本当に濃密な時間で、教育のことだけでなく、生活指導などもあって、いつも打ち合わせをやっていたものですから、そういう気持ちを持っていました。だんだん慣れてきたら、「これでいいのなら、いいや」というような考え方になっていった。そういう状態が続きました。1995年になって、文学研究科、文研で日本語教育関係の科目を持たないかと言われて、一応そこでも日本語教育関係の科目を持つようになりました。ただ、それはありがたかったのですが、どうしても何か自分としては、間借りをしているというか、居心地という面で落ち着かないようなところがありました。一つには、大学として、早稲田大学の日本語教育というものを、どういうふうにするのかというのを、あまり話し合う場というか、機会がなかったような気がします。雰囲気としてもちょっと、そういうものが出にくい気がしていました。したがって、しょうがないのかなというような気持ちで1990年代前半を過ごしていました。

細川：引き続き、私は、1991年4月に吉岡さんから1年遅れて、早稲田に戻ってきたというか、着任しました。その前の1980年代の後半は、さきほど少しお話したように、1983-84年にフランスで日本語を教え、帰って来て、金沢大学で「日本語・日本事情」のポストにつきました。それが1986年ですね、そのときにちょうど、事務の方が歓迎してくださって、「先生は、日本で30人目の日本語・日本事情ですよ」と言われました。それは、先ほど吉岡さんの言われたように、留学生10万人計画が1983年に

始まって、多くの留学生を呼び入れ始めたわけですね。それで、その受け入れポストが次々に国立大学に付いたわけです。国立大学のどこに付けるかという、いわゆる教養部という教養課程ですね、そこに「日本語・日本事情」というポストを留学生受け入れ教員措置として付けたわけですね。それで、私は金沢大学に公募で入ったのですが、北陸5県と言われる富山・石川・福井・新潟・長野の、五つの県の中で、いわゆる日本語教育のプロパーのポストというのがそこ一つしかない、つまり、私は北陸5県でたった一人の日本語教育の専門家という触れ込みだったんです。留学生も工学部を中心に全学に散らばっていましたが、所属は教養部でしたけれども、「全学の留学生の面倒を見てほしい」と言われました。それから、さらに「北陸5県に日本語教育の専門家は、あなた一人しかいないのだから、他の大学の面倒もできるなら見てほしい」とも言われました。そこで、「じゃあ、金沢大学を拠点にして、大きな留学生センターを創ったらよろしいんじゃないですか」と学生部長に進言したところ、「じゃあ、それやろう」ということで、予算はいくらでも付けると言われました。そういうような風潮というか、社会的状況がありました。1986年から90年ごろにかけてのことです。そこで、金沢大学の学生部に、まず日本語教育講座を創るんですが、もちろんそのときは、コミュニケーションアプローチの考え方は入っていましたが、まだ文型積み上げが中心で、そのテキストも作ったりして、その基盤を創るというふうな活動をしていました。ある意味では、完全にフリーハンドで、あなたの好きなようにやっていいというような雰囲気がありました。同時に、先ほど少し話しましたが、私自身の問題として、「日本語・日本事情」というポストなので、「日本語」のほうはなんとかイメージが湧くのですが、「日本事情」の方はさっぱり何をしていいか分からないという状況にありました。そこで、これに関してやっぱりいろんな連携を取らなきゃいけないということで、当時からあった国立大学日本語教育協議会の日本事情部会の委員になったりして、今、桜美林大学にいる佐々木倫子さん、群馬大学の砂川裕一さん、それから、当時慶應大学にいた長谷川恒雄さんたちと連携を取り合いながら、日本事情をどうするかというような議論をかなり自由にやった記憶があります。それが1980年代の後半です。それで、1991年から早稲田に戻ってこないかというお話があって、金沢の5年間に区切りをつけて、こちらの日本語センターに戻ってきました。当時の早稲田の日本語センターに来たときに驚いたのは、日本語教育が非常に分業化していて、自分のことだけやっていればいいという雰囲気でした。つまり、横の連携が全然ない。したがって、「日本語教育とは何か」という議論をふっかけても、誰も寄ってこないという状態。あるのは、プレイスメントテストの作成をめぐる、細かい、重箱の隅をつつつくような、つまらない会議でした。それでみんなフラストレーションを発散しているという印象を私は持ちました、それが的確な形容かどうか分かりませんが。それが1991年来て1995年ぐらいまで、その4、5年の間、私も個人的に精神的にかなり鬱屈した状況が続いたのを記憶しています。

蒲谷：すみません、「いた」側からちょっと一言だけ。1986年の時点で、日本語研究教育センターの専任教員は8名でした。そのときいらしたのが、森田（良行）先生、北條（淳子）先生、それから武部（良明）先生が退職されて、中村（明）先生、佐藤（洋子）

先生、川本（喬）先生、それから鈴木（義昭）先生と川口（義一）先生と私と。鈴木先生や川口先生がまだ若手の、鈴木先生が下から3番目にいたという時代でした（会場笑い）。1989年に、岡野（喜美子）先生と野村（雅昭）先生。野村先生は前の日本語学会の会長をされた先生ですけども、その後、文学部に移られました。1990年に吉岡先生がいらして、1991年に細川先生。だから、細川先生がいらした段階で12名の専任になったわけです。しかも、当時は、これはあまり深くはお話できないんですが、早稲田の中では文学研究科が、もちろん我々の出身の研究科なんですけれども、文学研究科のほうに日本語・日本文化専攻というところがありまして、そちらのほうに森田先生、北條先生、中村先生、それから吉岡先生なんかもそうですけれども、そちらのほうを担当されているという感じが強かったです。川本先生と岡野先生は先ほどから出ている国際部の方の担当ということで、それがたぶん細川先生が言われるような分業制で連携が取れていなくてということに関係はしてくるのかなと。それぞれ役割がそんな形で分かれていたということなんです。

古屋：たぶん次のお話にもつながっていくところだと思うんですが、当時は、日本語教育に携わっている先生方の中にも、日本語教育が自分の専門だとか、プロだとか、自分の領域だとか、そういう意識を持っている人とあまり持っていない人がいたということでしょうか。

吉岡：プロ意識というのがどの程度かちょっと難しいと思うんですが、少なくとも私が先ほどちょっと言いました外語大の日本語学校というのは、プロ集団だったというふうに思います。一つの試験問題を作るのに、全員に回して、原案者に返ってくると真っ赤になってくるというようなことをやっていました。みんなそれぞれ誇りを持ってやりましたし、そういう意味ではみんなプロ意識は持っていたはずなんです。ただ、現在のような研究レベルというのは、そこまではまだ。それぞれが専門を持って掘り下げるという状況ではないんですけれども、当時からそういう人たちはたくさんいた、というふうに私は思っています。

細川：これは、人によって立場も違うと思います。やっぱり早稲田の場合は、時枝誠記先生がいて、早稲田大学国語学会というのが立ち上げられて、それで、その後、辻村（敏樹）先生がその席を継がれて、人事を含めた学内のすべてのことを統括していらっしゃいました。こう言うと、やや語弊があるかもしれませんが、やはり「国語学支配」とでもいうべきものが大変強力だったんですね。つまり、私も国語学の中にいましたので、よく分かりますけれども、国語学が本流で、日本語教育は傍流というか、やはり国語学の支配の中の一部として日本語教育があった。当時は、日本語教育の大学院というような発想は、これっぽっちもなかったと言っていると思います。日研立ち上げという事実は、まさにそうした状況・意識への反旗だったのではないのでしょうか。今、あらためて振り返ってみると、そういう感じがします。

吉岡：早稲田に来て、今でも思い出すことがあるんですが、実は、教材を作ろうという話は何回か起こったんですね。初級教材を作ろうじゃないかっていうので、10人ぐらいかな、何回か会議を開くんですが、結局、上手くいかない。今の日本語の先生たちのスタッフを見たら分かる。個性が強すぎますよね。一つにまとまるはずがないというこ

とで、結局、蒲谷さんが結論で「もうやめましょう」と。「一緒に作るのは、やめたほうがいい。専任が10人いれば、10冊出せばいいことですよね」というのが結論になって、結局、それ以来一緒にみんなで作ろうという動きはあまりない、というのはとても面白いと思うんですね。早稲田のある種の一面をよく表しているなというふうに思いました。

3. どのように日研を立ち上げたか。その後、早稲田の日本語教育にどのような変化があったと実感しているか

古屋：では、そういう時代を経て、細川先生からもかなり鬱屈した状態にあったという話がありましたけれども、1990年代を経て2000年代に至って、日研が設立されるわけです。日研の設立もすごく大きな転機だったと思いますので、次の質問として、どのように日研が立ち上げられたかということ、そして、そのことでどういう変化が起こったのかということに関して、お話しただければと思います。

細川：それでは、私から口を切りたいと思います。先ほどお話ししたように、1990年代前半は、個人的にはかなり鬱屈した状況で、体調も一時はあまり良くなかった時期でもあります。ただ、なんとかしなくてはいけないと自分で思っていて、フランスのパリ大学との交換研究員制度を利用して、1年間とにかく抜け出してみようと計画しました。1995年秋から96年秋まで交換研究に出るんですけども、その直前に、半年ほど前、1995年5月のことですけども、突然、当時の国際課、今で言えば、秘書課だろうと思います。そこから電話がかかってきて、「(奥島孝康) 総長がパリに寄るから、向こうで総長と合流してほしい」とのこと。その秋からのパリでの住居のこととかを調べに行くために、1週間ほどの海外出張を予定していたときでした。それを秘書課は把握していて、連絡してきたという次第です。これは余談になりますが、2期の研究科長の経験からいうと、大学本部は、各教職員の状況をいろいろな意味でよく把握・管理していますね。サンミッシェル通りというパリの有名な通りのレストランで、総長が私に言ったことは、「日本語教育なんとかしませんか」ということでした。私がやや戸惑っていると、「なんかプランあるでしょ？」と言うので、「言いたいこと言っているんですか」と切り返すと、「いいよいいよ、好きなように言え」という調子。「じゃあ、大学院を創ったらいいですよ」と、私はそのとき一言だけ言いました。それから、2時間ほどワインを飲みながら、「大学院を創るってどういうことか」とか、「それが大学にとってどんな意味があるか」というような話をしました。大学院を創るとも創らないとも、総長はそのとき何にも言いませんでしたけれども、「ああ、分かった」と最後に言って、あとは、総長の山登りと旅行の話になりました。結局、その半年後に私は、交換研究に出るんですけども、交換研究から1996年秋に帰って来て、そのほとんどすぐ後のことです。当時はまだ7号館、大隈銅像がある横の建物に我々がいたんですけども、そこから22号館、この建物ですね、このビルに移る計画が、大学の本部から提案されたのです。この建物はもともと生命保険の会社が持っていたビルで、それを大学が買い取ったんですね。大変だったのは、22号館に移るにあたって、日本語センターの将来

計画を立ててほしいという要望が本部から来たことだったのです。たまたま蒲谷さんと私が将来計画委員というのに指名されました。なぜ私たちが指名されたのかは分かりません。しかし、委員に指名されたのですから、じゃあ、大学院を創りましょうと提案しました、当時、蒲谷さんは少し引き気味でしたけれども。日本語センター内では、不思議なことに、正面から反対する人は一人もいませんでした、そんなものできやしない、という雰囲気ではありましたが。とにかくその将来計画プランを作成して大学本部に提出したのが1997年の12月です。そこから少しずつ動き出して、大学院設置が2001年の4月ですから、道のりとしてはそんなに平坦ではありませんでした。その経緯は吉岡さんのほうからも少しお話があるかもしれませんが。つまり、大学院を創るということは、単に非常勤が足りないから教員養成をするというだけにとどまらず、やっぱり大学として、ドクターの取れる留学生をもっと受け入れたいという思いがとても強かったようです。その受け皿として日本語教育研究科に思いを託すというのが、おそらく当時の総長にはあったのではないかと。今から考えると、そういうふうに考えることができます。

蒲谷：先ほどもありましたけれども、私は常に最年少だったんですね。何年経っても一番下というか、吉岡先生が入られても当然私が最年少だし、細川さんが入られても最年少ということがありましたので、「将来」って付く会議はだいたい委員になる、ということで、将来計画委員会にも一緒に私が入っているんですけども。それはともかくとして、将来計画委員会に入っていて、当時、細川さんの暴走をどうやっておさめるかというところも私の役目の一つでしたけれども（会場笑い）、当時大学の中では、独立研究科設立の機運が少しずつありました。現在もあるアジア太平洋研究科とか、国際情報通信研究科といった独立の研究科、学部を持たない大学院を創るという機運が大学の中での流れとしてありました。ただし、1997年には宮崎（里司）先生がスタッフとして加わって、それが現在の13名体制、一応人数的には確立したのが1997年でしたが、1998年まではずっと所長は森田（良行）先生、中村（明）先生がされていた。1998年に吉岡先生が日本語センターの所長になって、そのとき、細川さんが組合の執行委員になるということで、私が教務主任で入ったんです。その時点で大学院の話をいろいろ進めていましたけれども、大学院を創るということに、大きく見れば、ちょっとずつ追い風は吹いていたんですけども、学内の雰囲気として、まだ何かこの小さな、13人のスタッフしかないところが大学院を創るということについては、やはりまだちょっと抵抗感がありました。私も教務主任として、計画を、全学から集まっている委員のところでお話をしたんですけども、雰囲気としては、「がんばってね」というぐらいの感じではなかったんですね。そんな状態がたぶん1998年の頃でした。我々のほうも、少しずつスタッフが変わって行って、まず、1999年に野村（雅昭）先生の後に佐久間（まゆみ）先生が加わるわけですね。2000年には森田先生が退職された後に戸田（貴子）先生が入ってくるような形で、少しずつメンバーにも動きがありました。戸田先生が入ってくれたおかげで、最年少からひとつ上がりまして、下から2番目になりました。それはどうでもいいですけども、少しずつスタッフが変わってきた。それで、日本語教育の、日本語教育学の研究科を立ち上げるんだという雰囲気が少しずつできてきた。それ

はもちろん、細川先生がエンジンとなって推進し、吉岡先生がいろいろ舵を切りながら、それと事務所のスタッフにも非常に優秀な人がいて、前進していけるかなと、そんな雰囲気がある時代でした。

吉岡：いきさつは、今、お二人がお話しになった通りなんですけど、私は1998年に日本語センターの所長になっていたものですから、学内では矢面に立たざるを得ないんですね。1999年になりますと、この頃はもう、大学院構想が学内に行き渡っていらしたので、全学的な会議など度々開かれて、私はそこへ行って、しゃべらなければいけないんです。みなさん、静かに聴いてくださればいいんですが、なかなかそうはいかない。厳しい質問がたくさん出るわけです。最後の段階で、既存の大学院の研究科長の会議、当時は研究科委員長会と言っていたんですが、そこに呼び出されて、いろんな研究科から質問が来るわけです、理念や設置科目など。それに対して一つひとつ丁寧に答えていかなければいけないわけで、そういうようなことを今、思い出しました。当時は、奥島（孝康）総長の時代で、奥島さん自体がかなり開設に積極的でした。公の会議でも、何か反対があると、じろっと睨んだりして、「日本語教育の大学院を創るのはちゃんとした理由があるからだ」というように、かなり援護射撃をしていただいた。大変ありがたかったです。そういう状況が全体の中であるにしても、やはり我々スタッフの熱意というのが一番強かったように記憶しています。毎週火曜日の夜6時から私の部屋で、専任全員が、どういう大学院を創るかっていう会議をやったんですね。だいたい6時から8時ということになっていたんですが、8時に終わることはあまりなかった。後でメモを見たら、1999年度は26回その会議を開いていて、2000年度は31回、これは公的な会議ではないんですね。そこで決めたことを、詰めたことを、公的な正式な会議で承認をしていくという手続きを踏んでいくわけです。今でも私が忘れないのは、私は会の進行をしていたんですけど、同僚のみんなの目の輝きというのはすごかったということですね。世界にないわけですね、日本語教育を専門とする研究科っていうのは、世界にないものをこれから創る、いいもの創りたいという意欲にみんな燃えていましたね。それを見ながら、もしかすると、今が一番幸せな時期かなと、内心ひそかに思ったりしました。それは本当に今でも忘れない記憶です。

蒲谷：事実誤認があるといけないとか言いながら、事実のことばかりお話ししていますが、当時吉岡先生の部屋に集まっていた日研立ち上げのメンバーは8名でした。13名の専任はいましたけれども、それぞれやはりまだ文学研究科のほうを担当されていたりということがあって、大学院の設立のメンバーとしては8名で立ち上げたということがあります。

細川：一言、私も補足しておくけど、1997年の12月に大学院構想を本部に出して、できあがったのが2001年なので、最初の公的な声上げから3年と少し、1995年春の（奥島孝康）総長との会食からは6年かかっているんですね。それはかなり長かったんです。順番から言うと、アジア太平洋研究科がすでにできていて、おそらくその次になるはずだったんですけども、国際情報通信研究科のほうに先にできて、日研は3番目になった、それはどうでもいいことなんですけれども。一番大変だったのは学内調整だと思います。学内で日本語教育がそれほど認知されていなかった。それから、いろんな分野・領域

と、たとえば、文学部や教育学部と重なるところもちろんあったわけですから、そこをどういうふうに差別化していくか、というか、独自性がある、ここに独立研究科を創らなければならない理由を明快に説明していくということが必要だったのです。その調整にとっても時間がかかった。それに至るまでに人的交流も含めているような学内の歴史がありますので、そこが時間かかったわけですね。ただ、当時私が考えたことは、そこで足を取られてはいけないということでした。で、逆に外から攻めるという、外の圧力を利用するというのを戦術として採りました。たとえば、1998年春に麗澤大学で全国の大学教員養成の協議会があったときに、早稲田で大学院を創りますというのを、学内の許可も取らずに、個人の資格で研究発表のような形でしました。タイトルは正確には覚えていませんが、「日本語教育の大学院を創ることの意味」というようなことだったと思います。そしたら、徳川宗賢先生（学習院大学・当時）がその席上で「早稲田が大学院を創るのは素晴らしい。マスターを創るんなら、続けてドクターも創るんでしょね」と発言してくださったので、「もちろんそのつもりです」と答えたところ、「素晴らしい」と言って拍手してくださるような感じでした。ちょうどその日の夜、徳川先生は急逝されたので、あの発言は早稲田への遺言だったと、今も記憶に残っています。ですから、外からの早稲田の日本語教育への期待は大きいという感触を、そのとき強く持ちました。だから、たぶん行けるだろう、と踏んだのだと、今、思います。

吉岡：ちょっと一言、私の立場から言いますとね、細川さんが外へ向かってそういうことを言うでしょ？ 学内で決まっていなかったことを決まったかのように。すると、2、3日後に私が呼び出しを食うんですよ（会場笑い）。それで、「日研がそんなことやってるけど、それは本当か」と。「いや、そんなはずはないんですけどね」と。そういうことが実は度々あって。さっき蒲谷さんが、細川さんの暴走をなんとかって言ったけど、後から見ると、実はいいコンビで役割分担をしていたのかなあとと思います。学内の他箇所とのことで一つの例を言いますと、私が先ほど文研にも授業を持っていると言いましたけれども、この日研ができると、日本語教育関係の科目を取っている院生たちが現にいるわけですよ。そこで、我々が文研から手を引いてしまうと、学生たちが非常に困るわけですね。具体的な調整をどうするかってようなことがかなり大きな問題になるわけで、当然それは迷惑をかけることになるわけですね。今でも覚えています、文研の委員長から、研究科委員長会場で「あなたたちが大学院を創ったあとでも、文研の最後の院生が修了するまで本当にちゃんと面倒見てくれますか、紳士協定ですよ。」って、正面を切って言われて、「やります」という約束をしました。実際にこれは、日研を立ち上げて、日研で授業やりながら、私は文研の最後の院生がいなくなった2007年3月までずっと指導をやっていました。その「やりましたよ」という報告をしに行きたいんだけど、その方はとっくに早稲田をお辞めになっていたものですから、ちょっと残念だなあという気持ちが今でも残っています。

蒲谷：その文研の委員長に「日研も十周年を迎えました」と年賀状をお送りしたんですが、「貴研究科の御発展を切に祈り申し上げます」という御返信をいただきました。

古屋：立ち上げの経緯はよく分かったんですけども、やっぱりどういう思いを持って、日研を立ち上げられたのかとか、その後どういう変化が起こったのかということに関し

て、もう少しお話しただければと思います。

蒲谷：そうですね、設立の経緯ばかりをお話ししていてもなんなので。中身としてですね、やっぱり、日本語教育研究科は、もちろん研究科の名前としては「日本語教育研究科」ですけれども、専攻名は「日本語教育学専攻」ですね。「日本語教育学専攻」ということで、日本語教育について研究するそういう学問分野を立ち上げたということです。しかし、今なお、日本語教育学とは何かということがまだ問われている時期かもしれません。10年以上経って、なお日本語教育学とは何かということを検討しなければいけないのかもしれませんが、既に修了された方、それから博士号を取られた方、午前中（に行われた博士公開発表会で）もお話ししましたけれども、42名の方が「博士（日本語教育学）」という学位を取られています。それから、修士の学位も「修士（日本語教育学）」なんですね。ですから、日本語教育学という分野を立ち上げて、日本語教育を専門にする人材を育てているという自覚と自負はあります。それまでは、当然、日本語教育を専門に研究してきたという教員もほとんどいないんですね。当時は「日本語教育学専攻」なんて、もちろんどこにもありませんので。ですから、「日本語教育学」を専攻にする、そういう分野を立ち上げたということは、もちろん立ち上げた我々の責任と自覚も必要ですけれども、みなさんもぜひはっきりと自覚を持って、自負を持って臨んでいってもらえるといいかなと思います。なんとなく「日本語教育」が専門だということは、もちろんそれはそれでいいんですけども、「日本語教育を研究する」、そういう学問領域を、我々は学位として出していますし、みなさんもこれからそれを専攻として名乗っていくわけですから。履歴書を見ると、時々「学」が落ちている人がいるんですけども、「学」を必ず付けて、付け忘れないように、「日本語教育学専攻」ということでやっていますので、ぜひそのあたりは、我々を含めて自覚できるといいかなと思います。それから、立ち上げて12年経ちました。それを受けて、教員のほうも変化しているというか、他の先生のごことは、もちろん私は正確には分かりませんが、私自身を振り返ってみると、設立した時点では、「待遇表現研究室」という形で立ち上げて、2003年の時点で、「待遇コミュニケーション」に名称を変えました。「待遇表現」から「待遇コミュニケーション」という形で再度立ち上げたわけです。それについても、いろいろな疑問や問題点や批判があるということは自覚していますが、とにかく、「待遇コミュニケーション」という領域を立ち上げました。それは狭い意味の「敬語・待遇表現」から移っていくということで、最初にお話ししたように、言語はコミュニケーション行為だということから、コミュニケーションという分野を考えていきたいということで、進化をさせてきているというように思っています。それはもちろん、狭い意味の研究室のメンバーだけではなくて、この日研に関わって、私の理論研究とか実践研究に出てくれた人もたくさんいるわけですけれども、そこはある意味、私も勉強の場でした。ですから、2001年ごろの状況を思い起こしている人からすると、2012年には全く違うということ、私も言いたい。見た目はあまり変わってないかもしれませんが、内実としては進化を遂げているというふうには思っています。いろいろな問題点もあるし、なかなか成長しきれないところもちろんあるとは思いますが、やっぱり12年経って、ものすごく内実が変わってきているなど。日本語教育の世界もものす

ごく変わってきているなど、そういう認識をしています。私も勉強しないといけないなどという感じもあります。いろんな広がりを見せていますし、いろんな深まりがあるとと思います。そういうことを常に感じながら過ごしてきた12年かなというふうに思います。

細川：そうですね。やっぱり2001年に日研が立ち上がったから、「日本語教育とは何か」、「日本語教育学とは何か」という議論を、この日研から発信しているという自覚を我々はたぶん持ち始めているんじゃないかと。それまでは、学会、たとえば、日本語教育学会は古くからありますけれども、その中でもそういう議論をする雰囲気はなかった。むしろ日研ができたことによって、日研の中から「日本語教育とは何か」ということを発信していく流れが生まれたと私は思っています。今、蒲谷さんも個人的な変容のことを話されましたけども、私自身も、日本事情がらみでことばと文化の問題というのをずっと考えていて、それを日研の中でどのように実現していくか、それを「実践研究」という、これは科目名ではなくて、実際に教育の研究の分野として「実践研究」というのを考えていかなきゃいけないという意識を明確に持つようになったのは、日研が始まって、日研の中での学生のみなさんとの様々な議論、あるいは、教員同士の議論の中で、実践に基づくものでなければならぬという、その意識というか自覚がとても強くなったと思います。2005年に博士課程完成のシンポジウムを学内でやりましたけれども、そのとき「日本語教育の専門性とは何か」という議論をしたときに、私はそのことをとても明確に意識しました。ですから、本来の「日本語教育学」というのは日研から始まるというふうにしても、決して大ボラではない、と。しかも、そんなに過激なことでもない。まさにここで始まっていると言っているんじゃないかなと私は思います。しかもそれを、「実践研究」という教育実践に腰を据えたところから発信しているという、その姿勢が重要だと。それも、もともと日本語センターの上に創った独立研究科ですから、日本語教育の実践とともにあるということが大きいだろうと思うんですね。さっきちょっと話に出ましたけれども、私が研究科長だった2004年に、センターの名称を「日本語研究教育センター」から「日本語教育研究センター」へ変更したのはその理由です。それは、「日本語を研究して教育する」センターではなく、「日本語教育を研究する」センターということなんです。「日本語教育学センター」と言ってもいいと思いましたが、そこに「学」を入れるのは学内的に難しかったので、「日本語教育研究センター」となっていますが、その中にある「研究」というのは「学」に置き換えることができるというふうに考えています。そういう意味では、ここが「日本語教育学」の発信母体だし、その根底にあるのが、研究は教育実践の現場から立ち上がるというその考え方だろうと思います。

吉岡：大学院ができたときに、それぞれ、ゼミ、研究室の看板を何にするかはまず自由にみんなで出してみようということで、全員で好きなテーマを出したら重ならなかったということで決まったんですが、私は一応「教材・教具」という形にしました。ところが、「教材」と言っても、そういうものを専門にしている研究者というのは、あまりいなかったんですね。研究論文もほとんどない。ですから、はじめのころは手探りでした。大学院を立ち上げて一つ考えたことは、教材研究の視点と方法をなんとかしなければいけな

いということ、それを若い院生たちに伝えなければいけないという、二つのことだったんですね。結局、考えたことは、縦と横。横軸のほうは、教材研究の方法、視点を明らかにすることです。これは、院生と一緒にやるのが一番いいだろうと思ひまして、教材研究のフレームワークということで、演習の時間にずーっとこれをやっていました。それから、もう一つは、これは、毎年院生の出入りがあっても、必ず続けていこうという約束で、各紀要や雑誌に発表された教材関係の論文を全て集めていこう。その代わり、それは院生たち全員が共通に利用してもいいということにしよう、ということをやってきました。縦軸のほうは、教材がどういうふうに昔から現在まで変化してきたかということをやっつけていかなければいけない、と思ひました。これは、私の個人的な研究のテーマでもあってやってきたんですが、明治期あたりから始めて、現在までどのように変遷してきたかということ。やっているうちに気がついたことは、これまで出版された教材がある箇所を集められていない、そういう公的な機関もないんですね。これはもう私の代ではできないので、私がやることは、これは海外も含めて、どこにどういう教材があるか、何年にどういう教材が発行されたかというリストをせめて作れば、次の若い研究者たちがそれを基に研究ができるかなということを考えました。今現在、復刻版の監修をやっているのは、その一環なんですけれども。そういうことを考えてきました。日研ができてどのような変化があったかというのは、私は蒲谷さんと重なるかもしれませんが、当初大学院ができたときに考えていた「日本語教育」というものが、年々、変化していくということを実感しました。それは何かというと、一つはこの13人、演習が14ですかね、みんなゼミを持って、それぞれが自分の領域を深めていくわけですよ。そうすると、最初にあった「日本語教育」というイメージがはるかに拡大していくという実感を私は持ちました。当初考えられなかったような大きな広がりや深さを現在日本語教育が持ってきた。それは、日研を立ち上げて、先生たちがそれぞれ研究をしてお互いを刺激し合ったということだし、また、その院生たちが同じようなテーマでどんどん発表してくっていくことが、我々の参考になるし、勉強になる。そういう意味での広がり、深みというものが出てきたという実感があります。

蒲谷：2001年に設立されて、先ほど8名で立ち上げたということをお話ししましたけれども、2002年には川上（郁雄）先生、小宮（千鶴子）先生が加わり、それ以降、池上（摩希子）先生、小林（ミナ）先生、館岡（洋子）先生と加わって、13名の体制がそこで完成したんですね。2007年に完成した、と。本当に「日本語教育学」ということを推進していく体制がそこで完成し、それから、5年が経過しているということです。

4. 質疑応答

古屋：一応ここまでで、1960年代から現在までを先生方の個人史とともに振り返るという形になったと思います。ここまでのお話でかなり聞いてみたいこともあるんじゃないかと思ひますので、ここで質疑応答の時間を取りたいと思ひます。あまりないような機会なので、聞きたいことがあれば、ここで聞いておいてはどうかと思ひます。何か質問がある方は挙手をお願いします。

蒲谷：事実誤認というか、何か間違ったことを言っていたところがありましたら、先生方で訂正をお願いします。もちろんそれ以外のご質問も受けまますけれども、もし訂正があれば、よろしくをお願いします。

質問者1：修士課程新入生のタワットと申します。いろいろお話していただきまして、ありがとうございました。今まで先生がおっしゃっていただきましたのは、今までのことというか、何があったかというか、ちょっと私のほうから外国人として、先生方に伺いたいことが二つありまして、お願いいたします。まずは、細川先生がおっしゃったおりに、立ち上げたときは、博士を取れる外国人を受け入れたいという考え方もありまして、今までどのくらい外国人の学生が博士を取れたかどうかと、今までの計画、将来の計画は、外国人に対してどのように、たぶんこれから早稲田大学は海外に、世界中でもすごい有名になると思いますので、それを答えていただければと思います。そして、二つ目は、私がここに参る前に、タイ人の先生方にもいろいろ言われていますが、早稲田大学の学生人数は他の大学に比べたら、結構、数が多いと。それは事実みたいです。それから、先生方は13名で、学生数は一年に秋と春で50名ぐらいですね。指導教員としては、これらの計画はどうなるのでしょうかということも、お分かりでしたら、聞かせていただきたいと思います。

蒲谷：ちょっと正確な数が分からないんですが、先ほど話したように、博士の学位を取られている人は42名いますので。私の関わっているゼミの人で言うと、留学生の人の人が多いです。約半数ですよ。だから、約半数は留学生の人が取得されていると。ちょっとごめんなさい、正確な数字が分からないんですけど。何か補足がありましたらお願いします。あと、数の問題は難しいですね。一応定員が修士は1年間で50名ということですね。ですから、定員としては修士が100名、博士が15名で3年ということで45名ですね。それが多いか少ないかという判断、それから、もちろん指導教員の数とのバランスとか、いろいろな事情があります。そのあたりは本当にいろんな事情がからんで決まるので。日研の方で必ずしも決定できることばかりではないので。諸般の事情がありまして、なかなか簡単にはお答えしにくいところがあります。

細川：留学生に学位を取らせたいというのは、まさに当時の大学の意向でありまして、もちろんそれは大学全体として、留学生に博士をどんどん出していこうという動きの始まりでもあります。ただ、我々は、留学生だからといって特別待遇するつもりは全然ありません。というのは、別に日本人のほうが優れていて、留学生がもうちょっとだとか、あるいは、その逆であるとかっていうことは全くなくて、それは個人個人の、一人一人の問題と考えていますから。だから、我々日研としては、今までも数で留学生をたくさん取ろうとかいうことを強く意識してこなかったんじゃないか。むしろ、優秀な人材が集まる、自然に集まってくる。その中に日本国籍でない人もたくさんいる。別にそれを中に入れて区別をして、留学生のためにはこう、日本人のためにはこう、というようなことは一切していないし、そこは全く対等に考えていこうというのが、基本的な共通理解としてあるんじゃないかなと思っています。ですから、我々で何人ならば適正ということは何とも言えないと思います。大事なものは中身の議論だと思っています。しっかりした議論ができる日研であれば、決して沈まないと思いますし、それを保証するような環境

を私たちは創っていかなくゃいけないと思っはいますね。日本語教育の研究科で、これだけ議論をしている研究科は他にはないと自負していいだろうと思います。逆にそれが、日研だけが特別なんじゃないで、それを日本語教育の世界にどんどん広げていかなくゃいけないという自覚を、私たちは持たなければならぬと考えています。

吉岡：正確な数字は分からないんですが、初代の委員長だったものですから、だいたい2年、4期くらいまではよく聞かれたんで、数字を出したことがあるんです。だいたいはじめのころは4割ぐらいが留学生でした。今は留学生が当初よりちょっと増えているんでしょうかね？ だから、だいたい半分近いかなというふうに考えていいと思います。

質問者2：早稲田大学日本語教育研究センターの佐藤です。面白くて感動的な話をありがとうございました。細川先生と吉岡先生に関してなんですが、今年度で（退任される）ということなんですが、もしあれば、特にやり残したと感じていること、それから、今後やっていきたいことを聞いていいでしょうか。それから、早稲田に対する気持ちは伺ったんですが、日本語教育界全体に対する苦言のようなものが何かあれば、聞きたいなと思います。よろしくお願ひします。

吉岡：やり残したことですか。そういう視点に立つとたくさんあるので、私はそういう視点を持たないことにしているんです。その場その場でできるだけのことをやればいいというのが私の考えです。そういう意味で、日本語教育界に苦言と言っても、それは当事者がそれぞれ考えてやればいいというふうに思っていますので、あえてそういう苦言は呈さない、というふうに考えています。あと、何でしたっけ？ これからやること。未来のことは分からないですが、ただ、少し時間ができるとやってみたいと思うことは、これまでの日本語教育の歴史を、少し興味があるところだけでも調べてみたいという気持ちはあります。できるかどうかは分かりませんが。

細川：私は通常の定年よりも7年早く選択定年制を取ります。なぜ選択定年制を取るかっていうと、組織を離れて、一個の自由人になりたいからです。別に何かどこまでやらなければならぬと自分で目標立てていたわけではないし、これからもやりたいことはたくさんあります。そのためには、自分の時間が欲しいと思っています。それで学生を見捨てるのかと問われますが、別に見捨てるわけではなくて、むしろ自由な立場で対等に議論していきたいと思っています。日本語教育に対しては、先ほどお話ししたように、私はもともと国語学から始まって、その国語学の問題点にも気づきつつ、日本語教育の世界に入ったわけですけども、逆に「日本語教育とは何か」という観点に立つと、現在の日本語教育の在り方に対しては、常に批判的にならざるを得ないという状況にいます。ですから、日本語教育の将来とか展望あるいは発展というようなことも簡単に言えないと思いますね。吉岡さんも言われたけれども、日本語教育の歴史というのは、結局何を創ってきたのかということをもう少しきちっと押さえないと、日本語教育は語れないんじゃないかなという意識を強く持っています。そういう意味では、ただ日本語教育の世界にいて、そこだけから見ていると、あまり見えてこないような気がします。先ほど蒲谷さんも国語教育との関係をおっしゃっていましたが、やっぱり国語教育とか英語教育とか日本語教育とか、それらの一体化したものとしての「ことばの教育」という観点で考えないと、おそらく一方的に日本語教育を批判してもしょうがないという

気持ちでいます。ですから、そのあたりを創ってきた人、ことばの教育を創ってきた人がどんな思想を持ち、どんな仕事をしてきたのかっていうことを一度洗い直してみたいという思いはあります。それには、やはり朝早く起きて、ゆっくり散歩をして、夜は早く寝て、という自由な自分の時間を持たないといけないかなというのが僕の選択定年制を取る理由です。

質問者2：すみません。「やり残したこと」だなんて、去りゆく者に対するような言い方をして申し訳ありませんでした。つまり、ラディカルに問い続けていくのかなと、そういう思いを持ちましたので、聞いてみました。ありがとうございました。

古屋：こちら（U-streamの書き込み）に「日研創設12年目の現在から見て、日本語教育学（教師）の専門性とは何だとお考えですか。3名それぞれの先生に」という質問が出ております。こちらの質問に関しては、いかがでしょうか。

細川：昨年、天津で日本語教育の国際大会があったときに、日本語教育の専門性について少し話をしました。従来は専門性という、ある固定的な知識とか情報、あるいは、技能・能力を持つ、それを目指すことが専門性だというふうに言われてきましたけれども、その知識とか技能っていうものを支えている、社会的な背景が特にこの10年、15年の間に大きく変わってきているんですね。それは日本語教育だけじゃなくて、世界的な思想の流れそのものが大きく変わってきている。だから、今まで重要視されていたものがそれほどでもなくなったり、従来ほとんど気づかれなかったものが最近指摘されるようになったりという状況が起こっています。そうなったときに、固定的なある「これだけ学べばいい」とか「これを学べばこれだけ伸びる」というような話では、専門性の議論はできないと私は思います。そういったものを固定的に捉えないとすれば、きわめて流動的、動態的なある状況、あるプロセスを専門性と呼ぶしかないとは私は解釈しています。日本語教育それ自体の幅が大きく広がって奥が深くなってきているという状況があるわけですから、その結果、その中でみんな一人一人が違う立場にいるということになりますね。じゃあ、自分の立場、立っている場所をどうやって説明し、違う立場の人とどうやって協働していくかという、その議論のプロセスが必要になります。その議論のプロセスをしっかり持てること、それが専門性ではないかと。少し抽象的なんですけれども、そういうふうには私は考えています。こういうふうに言うと、「それは日本語教育ですか、言語教育ですか、教育全般ですか」と聞かれそうな気がしますけれども、それはもう人間のあるべき姿であると私は考えています。ですから、教育というのは言語教育だけの問題ではなく、人間の形成の問題だということになる。まして「日本語の問題」では決してないと考えています。逆に今までは、専門性というのを個別の分野に固定化させていくという方向性自体に問題があった。そういう議論の立て方をしてきた姿勢、そこを解体させなければいけないというように、私は問題を自分なりに整理しています。

蒲谷：私自身の考えは、やはり日本語を教育するということの本質的な意義や意義を問うていくこと、そこに専門性があると私は考えています。それは、日本語って何なんだっていうところですね。「日本語とは何か」という問題。それで、もちろん「教育とは何か」という非常に大きな問題と「日本語とは何か」という問題が繋がっているということが、

私は日本語教育の専門性であり、日本語教育学が目指すところはそのにある、と考えています。だから、日本語を抜きに語れないんじゃないかというのが私の考え方です。教育、もちろん「日本語教育」ですからね、「教育」ですけれども、「日本語」を抜くことはできないというのが、私の考え方です。だから、それは日本語学かということ、それは全く違います。意味が全く違うんですけれども、「日本語教育学」の中の「日本語」というものを問うていく、そこの本質的な意味は何かっていうことをそれぞれが考えていく。それが日本語教育学の、それも「一つの」ということだと思いますけれども、一つの専門性だなというふうに私は思います。

細川：そこが私と意見の分かれるところですね。私はそういうふうに考えません。つまり私は、たまたま日本人であり、たまたま日本語を使う、日本語を使わざるを得ない環境の中で育ったから日本語母語話者であるというだけに過ぎない、というところから始めた、と思っているので、今、蒲谷さんのおっしゃったこととは、そこは線を引きたい、と。同じではないと言いたいということですね。

吉岡：こういう質問が非常に苦手というか、地域日本語教育の在り方などを見てみると、答えにくい。私は、日本語教育は日本語で人と知り合うこと、コミュニケーションを取る場を持つことで、教師の役割はそれを支援することというふうに単純に考えているものですから。特にその専門性というようなことを問うとすれば、そういうことの意味を自分で考えればいい、そのことを問うことが専門性かなというようなことを考えています。

5. 日本語教育という営みに関して、何をどのように次世代に継承したいか

古屋：それでは、この流れで、最後の質問に行きたいと思います。先ほど佐藤さんからも質問がありましたけれども、最後に、将来どのように、というか、次世代にどういう継承をしていきたいかということに関して、一言ずつコメントをいただいて、まとめたいと思います。

蒲谷：じゃあ、私から。直前にお話ししたと絡むんですけれども、あと、最初にお話ししたことも絡むんですが、私は「言語は行為だ」と考えたい。「日本語も行為だ」と考えたい。その一つの大きな理由は、日本語が体系だと考えたときには、人から離れるんですね。人とは別にあると考える。しかし、「日本語も行為だ」と考える、「行為だ」という意味は、表現行為・理解行為という意味、コミュニケーション行為という意味ですけれども、日本語を行為だと捉えると、必然的に浮かび上がってくるのは、行為を行う主体なんですね。そこにはコミュニケーション主体が出てくる。だから、日本語教育で本当に対象にしなければいけないのは、日本語が行為であると捉えたときに必然的に浮かび上がってくるコミュニケーション主体の問題だというふうに私は考えます。ですから、コミュニケーション主体が持つ意味・意義というのが、私は日本語教育学で追究していく一つの課題だろうというふうには考えています。そこから生じてくる問題としては、「人」の問題なんですね。これも言いすぎると、また広げるだけになってしまいますけれども、日本語教育学は人間学だというふうに考えています。人を育てることと

は何か、それから、人と人がつながるっていうことは何か、というあたりが、日本語によるコミュニケーションを教育していくこと、学ぶことにつながるというように私は考えています。それらを考える、そしてそれを実践していくということが、私は日本語教育学であり、日本語教育だというふうに捉えています。ですから、次世代に継承というのは大きなことかもしれませんが、そういうことを一緒に考えていきたいなと、そういうことを議論していきたいな、というふうに考えています。それを、私にはまだもう少し時間が残されていると思いますので、それをぜひ日研という場で、日研という場だけではありませんけれども、議論できればいいなと、そういうことをこれからやっていきたいと思いますということが私からの提案です。

細川：午前中の博士論文の発表で日本語教育の時代的な変遷として三つの立場があることが指摘されていました。それは、簡単に言うと、1960-70年代のオーディオリンガル時代と、1980年代に入ってからのコミュニカティブアプローチの時代と、1990年代、特に後半になってからの教育パラダイム転換以後、社会構成主義的な考え方が出てきた、いわゆる第三の時代があって、私自身もそういうふうに定義をしてきました。そういう変遷があって、現在21世紀に入り込んできているんですけども、立場が新しいものが一番いいみたいな風潮がどうしてもあるんですね。しかし、そうではなくて、たとえば第一の立場を批判する形で第二の立場が現れ、そして、第一の立場と第二の立場を総合的に批判しながら第三の立場が生まれている。だから、その批判は積み重なっては来ているわけです。決して、第三の立場が万能だとか、これが一番いいとか、最終地点だとか、これをみんなが目指せばいいとかっていう話じゃないんですね。ただ、次の立場が前にあったものを批判して出てくるからには、前の立場の何が問題なのかということが十分検討された上でのことなのです。それがたぶんこれから次々に循環していくだろうと思うんですね。別にどこの立場に立っているからダメだとかっていう話じゃないし、おそらく人、それこそ午前中の発表にあったように、人はたぶんその中を移動していくだろうと思うんですね。そのときに、前の立場、自分が批判する立場、自分以外の立場が何なんだということをよく理解した上で、自分の立場を持たないと、単に前の立場を批判する、古いものを批判する、新しければいいというふうになってしまうがちなんじゃないかなと思うんですね。それは、特に最近の院生と議論をしていて、とても強く感じるところです。つまり、もう批判されたものは見ない。それで、今の立場がいい。じゃあ今の立場が何かっていうふうに考えたときに、なぜ自分が今のその立場にいるのかってということが説明できない。なんとなくみんながそうだから、というふうになってしまう。そうすると、前のことも見えない。結局、今のことも見えない。その歴史的な変遷からいって、当然動いていて、いろんな立場がある。他の立場の人と協働していかなきゃいけないという現実はあるし、それはとても大事なことです。お互いの立場に立ちながら、でも議論ができる。お互いがそのそれぞれの立場をよく知らないとか、議論ができないという実感を最近強く持っています。ですから、今後、継承かどうか分かりませんが、日本語教育にとって大事なものは、そういう議論だと私は思うんです。その議論を絶やさないということ。それには、自分以外の立場について、よく考えるっていうか、自分の立場を守るのではなくて、他の立場についてもよく考えるという

ことが必要なのではないかな、それがやっぱり議論の活性化につながっていくと考えています。

吉岡：私が考えていることは、現在、主流になっているような考え方も、たぶん10年すると変わるだろうと思っています。これは、時代的にずっと見ていくと、常に変化をしているわけです。ですから、日本語教育の実践、教え方ということに関しても、それから研究という点に関しても、自分が今やっていることはどういう位置にあるのかというようなことを客観的に見る必要があるというふうに思います。今やっていることは、社会のニーズや社会的な理念、主張みたいなものが大きく関わっているはずなんです。ですから、自分がやっていることを縦横の軸で客観的に見ていくというようなことが、それぞれ自分のやっていることの意味を知ることになるし、現在の時代がどういう時代か、自分がどこにいるかということを見ることにもつながるのではないかな、そういう意識が必要かなというふうに考えています。

古屋：それでは、そろそろ時間です。この鼎談を行うきっかけでもあるんですけども、私は、今、自分たちがやっていることってというのは、別に急に出て来たわけではなくて、やっぱりいろんな経緯があってそうなっているということだと思うんです。そういう意味で、以前どういうふうにはやっていたのか、どういう流れでこうなっているのかを知ること、そして、知る機会を持つということが、私たちにとってはすごく重要なんじゃないかと思っています。そういう機会となったのであれば、企画者としても非常に嬉しいです。3名の先生方、どうもありがとうございました（会場拍手）。